

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2012年5月発行～

ひびきジャーナル



〒106-0031 東京都港区西麻布 2-9-2 Tel:03-3407-3726

Fax:03-3797-5640 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

No.32

発行日 平成24年5月1日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集 相坂政夫



玉木が永眠してから早五ヶ月、慌ただしく時が過ぎてしまいました。あの忌まわしい大震災からも1年余り、皆様如何お過ごしでしょうか。3月14日の「玉木宏樹をしのぶコンサート」には多くの方々にご参加頂き誠にありがとうございました。また、満席で入場出来なかった方々には大変ご迷惑をおかけし、誠に申し訳ございませんでした。再度7月28日土曜日午後3時から、世界を救う純正律音楽「玉木宏樹メモリアルコンサート」を開催致します。今回は水野佐知香をはじめ西潟昭子、野澤徹也、吉原佐知子、古川原裕仁、他多数出演致します。是非ご参加下さい。

ご予約等、詳細は巻末にあります「今後のスケジュール」にてご確認ください。

幼少の思い出

洗足音楽大学 教授・ヴァイオリニスト
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表
水野佐知香

新緑の美しい季節になりました。会員の皆様方お元気でいらっしゃいますか？

玉木さんをご逝去されて三ヶ月がたとうとしています。3月14日ラリーールでのコンサートも無事に終わり、7月28日のメモリアルコンサートでは、邦楽と、弦楽四重奏の玉木サウンドを味わっていただけたらと思っています。

この頃は、月日が経つのが早く、一日、一日大切に過ごせるようにと思いつながらも、雑用に追われなかなか精進できない日も多く、幼少の頃ヴァイオリンレッスンの取り組み方を懐かしく思い出します。

愛知県刈谷市で生まれた私は、近くのお兄さんが弾くヴァイオリンにあこがれて、4才の時から近所にあった才能教育のお教室に通い始めたそうです。

母は、何事も始めたらやりとげないとだめなタイプで(今は、65才から始めた書道で師範になり、愛知県から東京までレッスンに月に2.3回通い、増え続ける生徒さんに囲まれ過ごしていますが)その頃は、私のヴァイオリンに夢中で、私が幼稚園に通っている間に、次に弾く曲の弾き方等を先輩のお母さま方に聞きに行き、楽譜の読めない母は、口三味線で覚えて、幼稚園から帰ってきた私をつかまえては教えてくれました。

中学生の頃は、時間を無駄に使いたくないために、レッスンをテープレコーダーにとりますが、それを聴くということは同じ時間を二度過ごすということで、早く次の新しい発見がしたく、ちょっと忘れたところのみを聴き返す程度で、常にどうやって弾いたら上手くいくの?とか、くしゃみをしてもし右手がぶれない奏法をあれこれみだしたり、緊張をした時のために、弾きながら、身体の緩め

方を考えたり、いつも楽しく、考えていたように思います。先生が色々な演奏家のレコードからテープにダビングをして下さり、はっきり聴こえないテープレコーダーから、ボウイング、フィンガリング等を聴き取り、奏法を常に研究していました。等、いろんな思い出がありますが、その当時、考えた奏法が、今でも役に立っています。

[初心忘るべからず]ですね！

いつまでも、心も身体も若くありたい今日この頃です。

連続エッセイ【外科医のうたた寝】第 28 話
『山から来た珍客』

純正律音楽研究会理事

福田六花（シンガー・ランニング・ドクター）

東京生まれで東京育ちの僕が、豊かな自然に憧れて河口湖（山梨県）に引っ越したのは 2002 年のことである。当初は街中のマンションを借りて生活していたが、2005 年に、河口湖を見晴らす足和田山麓に小さな自宅を建て引っ越しをした。湖と御坂山塊を見渡す眺めが気に入って買った土地だが、住宅地でも別荘地でもない段々畑の一部であり、深い森に囲まれた静かな場所である。

こういうところで暮らしていると、足和田山の先住民である動物たちが、頻りに庭にやってくる。鹿、猪、猿、野兎、雉などがちよくちよく自宅前を横切っていていき、これはとても嬉しいことである。

数年前の春、僕の庭で目を疑うような光景に遭遇した。その日は 20 時過ぎに自宅に帰ったのだが、クルマのヘッドライトが照らす先に、なにか動物が跳ねている。ウサギよりもだいぶ大きく、鹿よりも小さいその動物は、後足 2 本でピョンピョンと跳ねながら、慌てたように庭を横切って行った。10 秒ほどは眺めていたのだが、どう見てもそれはワラビーであった。オーストラリアかニュージーランドにいる筈のワラビーが、なんで山梨県にいるのだろうか？このとても不思議な体験を僕は誰にも話せないでいた。

「ウチの庭にワラビーが居たよ、。。。。。」

こんなことを言っても誰も信じてはくれないだろうし、下手すれば嘘つき呼ばわりされかねない。幻覚とも見間違いとも思えないこの出来事は、僕のなかですっきりせずに燻り続けていた。

そんなある日のこと、山梨県のローカル TV の特集が真実を教えてくれた。その特集とは「山梨で巨大ウサギの目撃情報相次ぐ。」と云う噂を検証したものであった。

画面では巨大ウサギを目撃したと云うお年寄りが、身振り手振りを交えながら、びっくりした体験を伝えていた。裏山で普通の 5 倍はあるウサギがピョンピョン跳ねていた。80 年生きてきて、こんな大きなウサギは見たことがない、。。。

いくつかの目撃情報を受けて最後に動物学者がコメントした。

「そんな大きなウサギは絶対に存在しません。ペットとして飼われていたワラビーが逃げ出したか、山に捨てられたかして、それが日本の気候に順応して増えているのでしょう。」

錯覚でなかったことがわかり、すっきりした気分である。またいつか遭遇したいのだが、その後はお目に掛かれていない。

ムッシュ黒木の純正律講座 第 31 時限目

平均律普及の思想的背景について(20)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

20 世紀初頭、文芸の領域ではレトリックから文学への転換が行なわれる。かつてレトリックは言語運用法を扱う科目としてすべての学問領域の基礎教養教育を担っていた。そのような総合的なレトリックに対して、近代の申し子である文学は、対象を書かれた文学作品だけに限定してしまったのだ。そして、20 世紀以降、この文学こそが新しい学問として文芸の領域のメインストリームを形成するようになる。この状況下、人々は、レトリックをアンシャン・レジーム＝旧体制を象徴する古臭い保守的で権威的な学問と見なすようになり、文学をフランスの共和制下に開花した開けた革新的な分野と信じるようになる。このような単純な図式が、無前提に、当たり前のもので、広く受け入れられるようになってしまったのだ。そして、レトリックを信奉する人間は、時代遅

れの精神の持ち主と切り捨てられるようになる。例えば、ロラン・バルトの『旧修辞学（レトリック）』を訳した沢崎浩平氏は「訳者あとがき」（1979）の中で「バルトが「旧修辞学」に関する「予備作業」を必要とした理由は、本書の《諸語》、《結語》にはっきり書いてある。いうまでもなくそれは、新しい修辞学、新しいテキストの実践を求めるためであり、その途上で、いわば敵の正体をしっかりと見定めるためである」と断言するのだ。

実は、この事情は不等分律（純正律）と平均律との関係に極めて良く似ている。前衛音楽が音楽の進歩をリードした20世紀からこちらの時代、不等分律の可能性を語ったり、純正律の美しさを強調したりといった行為は、自動的に時代遅れの主張と見なされてきたのだ。

人は一回常識を確立してしまうと、その範囲外にある考えは受け付けようとしなない。多くの場合、問題がある、という意識すら持つこともない。レトリックや不等分律（純正律）は古臭い、そういう前提から出発して、レトリックや不等分律（純正律）は古臭い、という結論に達して満足する。こうなると、その常識を覆す明晰な証拠を目の前に突きつけられても、決して自らの常識を疑おうとしない。都合の悪い証拠は決して目に入ることはない、というわけだ。

例えば、フランソワーズ・ドゥエは『異議あり、18世紀フランスのレトリックは転義法に「限定」されてはいない』の中で、ジェラルール・ジュネットの『限定されたレトリック』（1970）の間違いを指摘した。ジェラルール・ジュネットはこの論文の中で、「新レトリック」の名の下に、レトリックは18世紀において既に総合的な言語技術から離れ文章を書く技術に限定され始めた、という歴史を展開しているわけだが、それに対してフランソワーズ・ドゥエは、18世紀から19世紀にかけてのフランスで実際に使われていたレトリックの教科書を調べ上げ、このテーゼが間違っていることを実証した。しかしこの研究はジェラルール・ジュネットの権威と、何よりレトリックへの偏見の下、無視される。この論考が活字となって発表されるのは、何と20年後の1990年のことだったのだ。

カエサルが言ったように「人は現実のすべてが見えるわけではなく、多くの人は見たいと思う現実しか見ない」ということだろうか。

「Musica おおた」の音楽よもやまばなし

♪ア・カペラのすすめ♪

純正律音楽研究会 正会員
音楽事務所 Musica おおた
廣川 深

以前にも今回と同じテーマで書いたことがあった。私は高校時代から今まで長い間合唱に関わってきた。団員として、エキストラとして、トレーナーとして、指導者として、という具合に立場はいろいろであるが、それらの経験から、今回は特に楽器(ここではほぼ 100%ピアノであろう)にたよらない合唱指導という視点に立って私なりにまとめてみたい。

合唱の練習において、最初の音取りの段階でピアノを使うことは、問題はないであろう。というよりまず音を覚えてもらうという意味では当然のことである。私はピアノのほかにもアコーディオンやチェンバロを使うこともある。問題はそれから先である。合唱フェスティバルなどで多くのアマチュア合唱団の演奏を聴いてみると、ピアノで音を取りながらパート練習をした上で、とにかく自分のパートを覚えて歌えるようになったら、全パートで合わせて合唱らしく聞こえるように仕上げる、というやり方が多いのではないだろうかという気がする。これでは合唱で最も大切なハモリの感覚が全く身につかない。練習の時いつもピアノを使っていると、聴く力が育たない。美しくハモるための音程を作る能力が身につかないのである。これでは何のための合唱曲かわからない。

また、アマチュアの場合は、ピアノの音程が絶対的に正しい音程と信じ込んでしまうことが多い。まあこれは当然のことでもあるのだが、このことから第二の弊害が生じる。それは、平均律のピアノで音を取っているのは純正な音程は望めないということである。合唱練習教本のコールユーブンゲンの序文にあるとおりである。純正な音程を経験していないから、音程が乱れても即座に正しい音に修正することができないという事態に陥ることになる。

三つ目として、今度は楽器を使わないことによる副産物ともいえるメリットをあげておこう。10年ほど前だったと思う。アマチュア合唱団の寄せ集めで、ベートーヴェンの第九を演奏したことがあるが、当日になってある合唱団の指導を急遽依頼された。その合唱団、はるばる遠方からお越しいただいたのはい

いが、音が取れていない人が多い。与えられた練習時間は2時間、5時間後には本番となる。そこで私がとった方法は、パートごとの音の確認のために、1~2回ピアノ(といっても、小型の電子ピアノしかなかった)を使い、あとは仕上げまでア・カペラというものであった。結果的には、満足とはいえないまでも、ピアノを使って練習するよりもはるかに速く、はるかに正しく合唱らしくなったのだ。最初の状態と比較すれば、まさに劇的スピードマスターであった。第九の合唱譜には必ずオーケストラのピアノアレンジ譜がついているが、合唱部分の全てをア・カペラで演奏した例はあまりないだろう。おかげで私は全てのパートが歌えるようになった。

以上のような経験をもとに、最近私の合唱指導では以前に比べてピアノを使うことが減った。また、これは合唱に限らず、ソルフェージュでの視唱などにもいえることである。ア・カペラで本当に美しいハーモニーを追求していこうと思う。

今回は今までになくお堅い、しかも辛口の文章になってしまった。次回は少しソフトにいきましょう。さて、次回のテーマは動物？遊び？音楽と酒？それとも我が家のお嬢様ネコに再び登場していただきましょうか。

CD レビュー 純正茶寮

< Ceux du Dehors >

純正律音楽研究会理事 黒木朋興



Ceux du Dehors - 1980 Univers Zero

Released by ATEM (7009) and Recommended Records(RR 10) in 1981,

Re-released by Cuneiform Records (rune 39) as CD in 1992

2012年2月11日・12日、ベルギーのUnivers Zeroが初来日を果たし、東京で3回のライブを行なう。ドラムと主に作曲を担当するダニエル・ドゥニを中心に、バスーン／コーラングレ／オーボエ奏者のミシェル・ベルグマンズ、サクソ／クラリネット奏者、ヴォイオリニスト、ピアニストとベーシストの総勢6人での来日であり、長い間、ファンが待ち望み、実のところ、現実には無理かも知れない、と半ば諦めていた来日公演だったのである。

玉木さんは生前「オレは、本当は純正律でヘヴィメタをやりたいんだよ！」とよく言っていた。綺麗な響きの純正律、身体に良い音楽、そんなイメージが強いけれども、純正律には他にももっといろいろな可能性があるのだ、ということ言いたかったのだと思う。そこで、私は「ヘヴィメタも良いけれど、こんな音楽もありますよ。日本のファンの間では＜暗黒室内楽団＞と呼ばれているバンドなんですよ」と言って、玉木さんにUnivers Zeroの音楽を紹介したのだった。すると玉木さんは「面白い！転調しないから、まさにオレの作曲技法との共通点も多いし、何より純正律での編曲が可能だ」とすぐに飛びついて来た。ただ、「作ってみたいけど、オレのファンは＜綺麗な響きの純正律＞というイメージを強く持っている方が多いからなあ。いきなりこれやって引かれたら困るんだよなあ。でもやってみたいなあ。まあ、タイミングをはかってそのうち挑戦してみるか」としきりに呟いていた。

結局、この企画は実現しなかったことになる。それどころか、玉木さんには、Univers Zero 初来日公演を目撃する機会すら与えられなかった。

今回紹介する『Ceux du Dehors』は、今でもライブで演奏される彼らの代表曲「Dense」収められている1980年発表の彼らの3枚目のアルバムだ。決して純正律ものではない。しかし、純正律音楽の将来の多様な可能性を垣間見せてくれる一枚だと思う。複雑な変拍子にバスーンがメロディを奏で、中世美術やブリューゲルなどの絵画作品の持つ暗黒の雰囲気を放つ彼らの音楽は、今の私には、玉木さんへのレクイエムに聴こえる。

玉木先生との出会い

ストリング誌 編集長 青木日出男

初めて玉木先生にお会いしたのは、ストリング誌で純正律をテーマにした時だ。もう、十年以上も前になる。私は、吹奏楽やママさんコーラスでは当たり前の純正律が、弦楽器、オーケストラのクラシックの世界ではあまり意識されていないことに疑問を持ち、玉木先生の門を叩いたのだが、私の疑問にことごとく答えてくださった。

純正律に関して書き出すと、紙数が足りないでやめておくが、一つだけ書くとすれば、純正律は、意識するしないに関わらず、常に存在するものである、ということだ。それが自然の摂理であるからだということは、玉木先生と出会って確信を持った。

その後、連載、酒席で玉木先生と親しくなるにつれて、玉木先生からは私の馬鹿さ加減をよく怒られたものだ。玉木先生が怒ると本当に怖い。しかし、不思議な感覚だが根底には常にあたたかい人情を感じたし、人間味が溢れていたから、安心して怒られたものだ。

N 響のコンマスのお話を何故受けなかったのですか？と不用意に聞いたときも、烈火のごとく怒られた。玉木先生は、自分だけ特別扱いされる事が嫌だったのである。その後、その話を持ち出され、大勢見守る中でまた怒られたこともある。私も一度発言したことを簡単に撤回できず、苦し紛れに「N 響のコンマスになられなかったことは、日本の音楽界にとって損失だと思ったからです」と言ったのだが、言いながら、これは実際、その通りなのではないか、と内心思ったものだ。ただ、もし本当にコンマスになられていたら、今日の『玉木ワールド』はなかっただろう。

私の苦し紛れの発言が、つぼにはまったらしく、その後もご自身からこの話題を持ち出され、そのたびに怒られ、またさらにベートーヴェン論争にも発展したものだ。玉木先生のベートーヴェン嫌いは筋金入りだ。私もブラームスとどっちか取れ、と言われたらブラームスを取るだろうから、さほどベートーヴェンが好きではない。おそらく、稚拙な私との論争を楽しんでおられたのかもしれない。怒ることが玉木先生一流のパフォーマンスであり、生き方なのだ、と理解してからは、私はとても気が楽になったばかりでなく、お互い解りあえる部分も圧倒的に増えたように思う。しかし、玉木先生のパフォーマンスを理

解する前に、きっと多くの方が恐れをなして退いていったのではないか、と思う時、この生き方は相当な勇気と根性がある生き方だったことは、察する事ができた。酒の席で「いつも言ってしまうってから、あとでどれだけ後悔するか、分からない」と言われた時、ああ、やはり玉木先生は相当に繊細な方だったのだな、と改めて思ったものだ。

玉木先生は、常に正論を言っておられたと思う。音楽の世界で平均律という自然の摂理から反した合理主義的な音階が正しいものだと言われ、教育すること自体、おかしいのだが、教育というのはつくづく恐ろしいものだ。このことにごく一部の人間が気づき、異を唱えるのだが、大多数の人は、面倒なことは避けるのかもしれない。

正論を主張すると、この世の中は生きにくい。それどころか、異端視され、場合によっては迫害を受ける場合もある。玉木先生は、しかし、真っ向から立ち向かったのであろう。玉木先生ほどの才能を持ち合わせていたら、長いものに巻かれるというのは、我慢ならなかったのであろう。であるから、主張と実行とにぶれがまるでない。私は、本音と建前と主張と実行とにぶれがあるから、自分の心の中で、どう折り合いをつけるのか、どう矛盾を自ら納得させるのか、そのことばかりにとらわれている。

であるから、心の中では、玉木先生の言うとおりに思っても、実際は、真逆の立場をとったりすることもあった（かもしれない）。しかし、そういう自分を容赦なく叱りつける玉木先生のおかげで、私はこの矛盾した心が多少は軽くなったのかもしれない。

玉木先生は、しかし、女性には優しくフェミニストであった。若くて綺麗な女性演奏家をご紹介し、対談をされると、いつも楽しそうで嬉しそうであったし、酒もうまそうだった。コンサートでの共演ということにもつながっていった。私の家内が、よく「男はやっぱり実力次第よね」と当てつけがましく私に言うが、玉木先生の才能と力をそのまま100%素直に受け止めるのはやはり女性の方であろう。私は圧倒的な才能を目の前にすると、あたふたしてしまう。しかし玉木先生にご紹介した女性演奏家の方々は、冷静に客観的に受け止められていた。であるから音楽の話も限りなく展開していたものだった。

玉木先生は、圧倒的なパワーでもって生き抜かれた。旅立たれた時も、ごく一部の方にしか知らされなかったが、これも先生一流の美学を通されたのだと思う。

【玉木さんの思い出】

翻訳家・きき酒師 川合 浩

6年前の秋だった。知己だった蔵元が東急東横店で試飲販売をしていた。いつものように顔を出しに行ったら「待ってました、鰯しゃぶを食べに行きませんか」という。突然のことであっけにとられていると「さっき来たお客さんが表参道にお店を持っていて、鰯しゃぶがお勧めだといっていたので」とのこと。もう少し話を聞いたうえで翌日に行くことにした。

お店に行ってメニューがある程度進んだ頃、女将さんがそばに来て「お店のBGM、ジュンセイリツよ」という。初めて耳にする言葉だった。純正律について女将の話を聞いて興味を持った。帰宅後、ネットで調べてみると、なるほど。聞き知っているピアノの平均律なるものでは、厳密にはハモらないことを知った。どうりで、中学時代、音楽の時間にピアノで協和音なるものを聞かされたが「きれいだ」とは思えなかったはずだ。

さらに調べていて、なんと翌12月には西麻布のフレンズなる喫茶店で純正律のミニコンサートがあることを知った。当日になって電話で参加の意思を伝え、あの日は、おそらく自宅から徒歩で行ったのではないかと思うが、到着が開始ギリギリで一つ空いていたカウンター席についた。

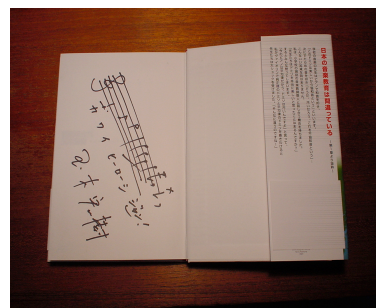
ミニライブが終わり、時間のある方ということでお店の大きなテーブルには玉木さんを囲んで人の輪が。私は隣の席にいらした写真家の清水さんという方と、銀塩カメラはとか、デジカメはとか、メモリの信頼性はとか、そしてゲーム機の話など、話題が音楽に及ぶことなく話していて、時計を見たらなんと一時間経過していた。ぼちぼちお暇をと、玉木さんの席までご挨拶に行ったら先生が「あんたの話、面白いからこれから赤提灯で一杯飲もう」とお誘いを受ける展開に。カウンターでの話し声が聞こえていたらしい。

翌年には東京マラソンの第一回目。PTAで一緒だったマラソンの瀬古利彦さんから「東京マラソン応援バンドをつくるからギターで参加しませんか」とのお誘い。学生時代クラシックギターをやっていて、遊びでコードを弾いてみたがどうも濁りを感じてコードを弾かなくなっていたが、ギターはピタゴラス音律。こちらも厳密にはハモらないという知識を得た後だから、ジャズ系の

コード演奏もなんの気兼ねもなく出来た。2月のお台場での本番演奏が終わり、次は6月の大宮公演という話しもでていた。大宮ではマラソンの増田明美さんにお得意の都はるみさんの歌を歌ってもらおうということになり、伴奏は選抜4名で私はギターで歌謡曲風に。なにせ約30年振りギター演奏でスケールの練習をしたいと思いますと思い始めていた。

教本は渋谷のヤマハに行つてなどと思つていたが、「そうだ、玉木さんが革命的音階練習なる本を出していたな」と思い出し、さらに「そうだ、フレンズに玉木さんのCDとかがあったから、本も置いてあるかも知れない。ひょっとしたら玉木さんにまた会えるかも知れない」と。5月のある日、六本木での映画の帰りフレンズに寄つてみた。玉木さんがいらしていた。本を購入し、ご挨拶すると、なんだか警戒している様子も。赤提灯で一緒したことはご記憶にないようだった。玉木さんに「こちらに来れば、玉木先生にまたお会いできるのではと思つて来たんです」というと、驚いた様子で「あんた、引き強いねえ。ぼくがここに来るの珍しいんだよ」と。その時の様子は今でもはっきりと憶えている。「音楽革命論」も購入していたので、こちらには、あの手書き五線譜サインを頂いた。

西麻布の事務所に所用もなく伺つたのは、一度だけ。そして、一度だけになつてしまった。一昨年の夏の猛暑が続いている日、何故だか分からないが先生のところに行きたくなつていて、電話した。「暑気払いなど、いかがですか？」先生「グワッハッハ」。



事務所近所の酒屋「長野屋」に立ち寄り、ここのご主人とは日本酒の関係で知己で、「甕雫」を調達。先生と話していたら、先生が掛け時計をチラッと見て「じゃ、行こうか」と、近所の馴染みのお店へ。

その日は、先生が純正律普及に力を注いでいらしてきたことに対するお礼と、私が純正律を知つてどれだけ人生を明るく見られるようになったかを伝えることに。予定稿ではなかつたが、そうゆう話をさせて頂いた。そして、お礼を申し上げた。今風にいうと「告つた」感じだろうか。先生からは「差音」の話しを聞かせて頂いた。これは先生の日記にもある(2010年07月28日「差音」)。この日の訪問と話の内容は、たんなる偶然ではなかつたような気がする。

3月14日 玉木宏樹をしのぶコンサート
ご参加頂いた方々の感想特集

尾形孝司

初めてお声を掛けて頂き、御親交賜り3年になりました。
1月8日でした。
少し前に、先生の本に触れて共感、感興冷めやらぬ内に、先生のブログを発見しました。
当日は、私の誕生日で有り、少し舞い上がっていた為か、それまでは余り行な
った事の無かったブログへの投稿をしてしまいました。
直ぐにご返事を頂き感動する中、お声迄掛けて頂き、時々事務所をお伺いさせ
て頂く様になりました。
それ以来、一度は先生のコンサートに行きたいと思っておりましたが、その内、
わたし自身が病魔に倒れ、その後回復しても、先生ご自身が体調を崩される等、
結局、機会を得ませんでした。都電コンサート、茗荷谷ラリールでのコンサ
ート、行きたかった。
突然の訃報。その数日前の1月8日に亡くなられたとの事・・・。
初めて聴くラリールでのコンサートが、先生を偲ぶ会。水野佐知香さんが玉木
先生に代わって、縁の方々と共に演じる。
先生、このホールは響きが良いですね。音が濁らない。

山崎聡子

小さな音楽堂で、玉木先生のことを思い出しながら美しい音楽に包まれると
いう、珠玉の一夜でした。まるで、心身が浄化されたように感じました。純正
律音楽を聴くことで体調が改善した人が続出しているという話は知っていま
したが、「さもあらん」と実感しました。キラキラした音色が全身に降り注いで
きて、ただそこに座っているだけで幸せでした。美しい音楽は、耳で聴く必要も、
頭で考える必要もないのですね。「そんなこと今さらわかったのか。だめだな」
と玉木先生のお叱りの声が聞こえます。ごめんなさい。

奥様をはじめ、水野佐知香さん、三宅美子さんが披露してくださったエピソードには、会場じゅうが盛り上がりました。偉大な音楽家の先生に対して失礼なのは重々承知しておりますが、玉木先生は本当にチャーミングな方でした。美しい音楽を聴くのはもちろん、玉木先生の思い出話が聞けるのも、純正律コンサートの楽しみの1つです。また参加させていただきます。

白井淳一

玉木宏樹さんとは古くからの付き合いではありません。昨年だけ、そう2011年に限定したお付き合いでした。たとえるなら、周囲は白と言っているものの、自分はそこに黒を感じ取り、それを声に出して指摘できる才覚。地位や見返りのために、自分の気持ちにフタをしていく人が多いのに対し、玉木さんは自分の気持ちとこだわりを守り続けた人でした。お付き合いの期間こそ短かったものの、音楽とヴァイオリンについて玉木さんから受け取った示唆は、長く私を刺激し続けてくれることでしょう。その存在の大きさは日に日に強く感じられますが、「今ごろ惜しんだって遅いんだよ！ガハハ」と草葉の陰から笑われているかもしれませんね。謹んで哀悼の意を表します。さようなら、玉木さん。

金子きよみ

初めて玉木先生のセミナーに伺ったのは昨年のこと。もともと私は歌が苦手だったので音楽には殆ど興味を持っていませんでした。けれど、ことばと人間にはとても興味があり、多言語の自然習得を活動の一部にしたヒップファミリークラブに参加していました。その仲間が「ねえねえ、純正律って知ってる？」と紹介してくれたのが玉木先生のセミナーでした。聞きなれないことばに惹かれて参加したセミナーで初めて間近にヴァイオリン

演奏を聞き、音色にうっとり。また音階の区切り方にもいろんな方法があつて、普通学校などで教わるのは平均律といい、転調がしやすいように微妙にずらされた音階なのだとということを知りました。

対して純正律の音階は、和音がとても綺麗に響くのだと。

「音楽はことばなんだ」「音痴はいない」

玉木先生のお話と愉快的ヴァイオリンを聴いて、遠かった音楽の世界が近くなったように思います。

そして今年の一、先生の急な訃報を受けて残念でなりませんでした。

もっと直接先生のお話を聞いたり、演奏をお聞きしたかった。

たった一回しか参加できませんでしたが、セミナーでの玉木先生のお話と演奏は魅力的だったのです。

そうして3月14日、追悼コンサートに出かけました。

60人ほどの小さな会場にいっぱいの聴衆があふれ、2人のヴァイオリンと1人のグランドハーブによる純正律のメロディは、澄んだ響きでリラックスした気分になりました。セミナーで玉木先生がヴァイオリンの音でおしゃべりするみたいに自己紹介されたように、コンサートでもヴァイオリンのおしゃべりを実演してくださって楽しい雰囲気が一層盛り上がりました。

ご家族やご友人方から若き玉木宏樹氏のエピソードなども披露され、アットホームななか、コンサートは終了しました。

出会いというのは不思議です。

夢心地で帰宅後、意外なつながりがあつたことがわかりました。

ヒッポファミリークラブで私達が日常の活動に使っている多言語CDの中に、各国の歌やオリジナル曲を入れた「sing a r o n g d a n c e a r o n g」というシリーズがあります。そのなかの「ふるさと未来に」を作曲してくださったのが、玉木先生だったのです。編曲も多数手がけてくださっていました。7月のコンサートにはヒッポの仲間と一緒に聴きに行きます。

玉木先生、天国でも愉快的ヴァイオリン弾き続けてくださいね。

★ 一曲ずつのダウンロード販売を開始致しました。

昨年末から一曲200円でDLサービスを開始致しております。

アップしてあるCDは7枚ですが、これから増やしていくつもりです。是非ご利用下さい。

今後のスケジュール

2012年7月28日土曜日

世界を救う純正律音楽

【玉木宏樹メモリアルコンサート】

会場：【かなつくホール】

(JR 東神奈川駅、京浜急行仲木戸駅から連絡橋徒歩1分)

(東急東横線東白楽駅から徒歩10分)

横浜市神奈川区東神奈川1-10-1 (Phone: 045-440-1211)

日時：2012年7月28日(土曜日) 開場：14時30分 開演：15時

出演：水野佐知香・西潟昭子、野澤徹也、吉原佐知子、古川原裕仁、他

入場料：3,000円

ご予約：TEL03-5317-0291 FAX03-5317-0289

mail: puremusic0804@yahoo.co.jp



おたより募集!

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東3-2-5-102 NPO法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail: puremusic0804@yahoo.co.jp

http://just-int.com/

<http://www.archi-music.com/tamaki/>

平成24年5月1日

発行責任者：NPO法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫